

学校経営のポイント

“’07年国際数学・理科教育動向調査”結果

若井 彌一

今年最後の月である12月に入って、10日付けで、国際教育到達度評価学会（IEA = International Association for the Evaluation of Educational Achievement）が、2007（平成19）年に実施した「国際数学・理科教育動向調査」（TIMSS = Trends in International Mathematics and Science Study）の結果が公表された。

前回の調査結果については、本紙 No.98（平成16年12月25日号）で取り上げているが、今回もこの調査結果について述べておきたい。

よく健闘しているのではないか

前回の調査（2003 平成15年調査）結果については、新聞報道では、国別相対的順位の低下と受験者平均点の低下を強調していた。これに対して、今回の調査結果については、調査対象となった小学校4年生、中学校2年生の算数・理科、数学・理科ともに、「平均得点はすべて前回以上」「前回調査から調査参加国が増加した（小：25 36カ国）が、国際的に見て上位を維持」と表現されている（文科省HP）。

マスコミ報道も「中2理科、世界3位に向上、学力低下『歯止め』と文科省」（12月10日『山陽新聞』）という見出しで、次のように解説している。

「…日本の中学2年は、48の国・地域中、理科が前回03年の6位から3位に向上、数学は前回と同じ5位だった。小学4年は36の国・地域中、算数、理科とも4位（前回各3位）。小中の得点はすべて前回以上で参加国・地域数が増える中、上位を維持した」。

マスコミの扱いは比較的小さいが、内容的には、心安らく報道内容となっている。小学校の場合、前

回の3位から4位に下がってはいるものの、むしろわが国の子どもたちの健闘ぶりを称えてやるべきではないか。詳細な内容分析については、それぞれの学校で検討していただきたい。

“勉強が楽しい”と思わない意識傾向

学力の維持という点では、よく検討している日本の小・中学生という見方ができるのだが、算数・数学、理科の学習についての意識はどうかというと、「勉強が楽しいと思うか」という問いに、「強く思う」の回答は、小学校・算数で34%（前回比5ポイント増）であり、国際平均より21ポイント低い。

また、中学校2年の場合は、「強く思う」の回答は、数学がわずか9%、理科も18%にとどまっており、国際平均よりも、それぞれ26ポイント・28ポイント下回っていることが報じられている（12月10日付け『中日新聞』）。

この結果を、児童・生徒の責任と批判するのは筋違いであろう。それにしても、なぜ、これほど国際的に見ても、勉強（学習）が楽しいと思わない（というより、思えないと表現すべきか）児童・生徒が多いのか。楽しいと思わない（思えない）児童・生徒に、楽しいと思えと強要したり、感謝の念が足りないからだ、と短絡的に責めるやり方は、おそらく教育方法論の理にかなっていない。

どのような指導上の創意工夫をもって臨むことが必要であるのか。これは「学ぶ」ことについての大切さと充実感を味わわせるための学校教員と保護者相互の連携協力によって、地道な一步一步を築いていくしかない。来たる年を、その取組みに力を注ぐ学校経営と教育実践の具体化に情熱を傾けたい。

（わかい・やいち = 上越教育大学大学院教授・附属図書館長）

●最新刊好評発売中！

清水俊彦【編】

定価 2,520 円

教育開発研究所

『教員免許更新制の概要とポイント』

■好評発売中！

4月から実施の「指導改善研修」、免許更新制導入等へ万全の対応を！

『教員の養成・免許・採用・研修』若井彌一編著 A5判 370頁 定価 3570円